

こぶ神様

まだ石油や電気の無かったむかしの人びとは木を大切にしていました。ナラやクヌギなど良く燃える木を数多く植えて林として手入れをして、何年か経つと切って薪として保存し燃料にしていました。

加納のあるところの林に一本のおおきな木が切り残されていました。地上2メートル位にコブのようなふくらみがいくつもあり、珍しいので切らなかつたらしいのです。

ある人がこれは珍しい、飾り物にしようかと、のこぎりを持ち、はしごをかけて、ギーコン　ギーコンと切り始めました。

ところがどうしたはずみかはしごが倒れ、落っこってしまいました。幸いけがもなく手と足をすりむいたぐらいで済みました。少し痛むひざをこすりながら上を見ると、切り口に何か見える。

「ハテ……」

と目をこすって良く見ると赤い血のようなものがタラリタラリと落ちてくるではありませんか。

あのコブの中に木の精でもこもっていたのかも知れません。

「これはとんだことをしてしまった。どうかおゆるしください」

と手をあわせてしばらく拝んでから見上げると血の流れは止まっていました。

そして、林の木は切ってもこの木だけは残しておいたのです。この社は、こぶ神様として土地の人びとは大切にしていたとのこと……。

